

医師の不足と過剰

－医師偏在について考える－

桐野高明[†]第73回国立病院総合医学会
(2019年11月9日 於 名古屋)

IRYO Vol. 74 No. 11/12 (488-490) 2020

要旨

医師の数は1970年代の一県一医大政策以降、毎年約4,000名ずつ増加して来ている。2000年頃から、病院はその役割を分化させ、急性期を担当する基幹的病院は、平均入院日数を短縮するとともに、より多くのマンパワーを集中させるようになった。急性期の大型病院の医師数は40-50%増加した。2004年に始まった医師の初期臨床研修制度は、さらに若手医師の大型病院への集中を促進した。その結果、都市部に医師が集中し、地方の病院や都市部の中小病院には医師がいきわたらず、医療崩壊とまでいわれる医師不足状態が生まれた。政府はこれを受けて2008年より医学部の定員を増加させるとともに、地域枠を含む臨時定員も大幅に増加させた。結果として2020年には医学部定員は9,400名を超えることとなった。

医師が人口10万人あたり何名いれば足りるのか（マクロの課題）は、時代にもなって変化してきた。現時点ではOECD諸国の平均値に近い人口10万人あたり300名という値が目指すべき目標とされている。医療需要は2040年をおおよその境として減少し始める。現在のままの医師養成数では、18歳人口比での医学部定員では、先進諸国中もっとも多いレベルを超える。どこかの時点で医学部定員の抑制が必要となるであろう。わが国では、医師が地域的にも、診療科の観点でも偏在している。医師が最適の分布から外れれば外れるほど、医師のマンパワーの有効活用という意味では非効率であり、より多くの医師が必要になる。医師の偏在の是正（ミクロの課題）は今後の大きな課題である。政府は医師の偏在対策を重要な政策の柱と位置付け、その改善の方向を検討している。地域における偏在や、診療科の偏在は解決の容易ではない課題であるが、問題が今後徐々に緩和されていくことを期待したい。

キーワード 医師の数, 医師不足, 医師の偏在

はじめに

1970年代に31校の医学部が新設され、医学部の定員は8,000名を超えることになった。しかし、医師過剰の可能性を危惧する意見が強くなり、医学部定員は7,600名程度に抑制され、ほぼ20年間その数は

固定された。その後今日に至るまで医師総数は毎年4,000名近く増加を続けている。医師が大幅に増やされた1970年代から40-50年ほど経過し、現在増加しているのは高齢の医師である。このような医師数増加の経過をよく理解しておかなければ、医師数の冷静な議論はできない。

地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館 [†]医師
著者連絡先：桐野高明 地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館 理事長
〒840-8571 佐賀市嘉瀬町中原400番地

e-mail : tkirino-tky@umin.ac.jp

(2020年2月18日受付, 2020年5月8日受理)

Shortage and Surplus of Doctors : The Origins of Health Care Disparity

Takaaki Kirino, Saga-Ken Medical Centre KOSEIKAN

(Received Feb. 18, 2020, Accepted May 8, 2020)

Key Words : number of doctors, shortage of doctors, uneven distribution of doctors